

令和 6 年度 学校経営報告

八王子市立緑が丘小学校

校 長 坪内 聡

1、今年度の取組と自己評価

学校の組織力を生かし、全教職員共通理解のもと、児童一人一人を生かす個に応じた教育を展開した。また、校内研究・OJT・年次研修・各種研究会、研修会等を活用し、教員の授業力を高め、授業改善を図り、個に応じた教育を進めた。生活指導においては、いじめの早期発見・早期解決を図り、保護者・地域から信頼される学校を目指した。

(1) 教育活動等の取組と自己評価

① 学習指導について

- ・ 毎時間の授業で学習課題を明確にし、児童が、分かる・できる喜びを感じることができる授業づくりを進めるとともに、学習意欲を高め、学習習慣の定着を図った。
- ・ 算数科では、基礎基本の定着と応用力・思考力の伸長を図った。また、「みどりっ子算数道場（5、6年生）」「みどりっ子算数教室（1～4年生）」を計画的に実施し、特に習熟度の下位グループの児童の学力向上を図った。
- ・ 体験的な学習活動を充実させた。3年生では蚕を育て繭から糸を取ることを通して、八王子の絹産業の関心を高めた。4年生では、湯殿川のガサガサ体験を活用して環境教育を深め、5年生では地域の農業経験者の力を借りて、稲作体験を実施し、米作りの大変さと収穫の喜びを味わわせた。4年生、5年生、6年生では、認知症キッズサポーターフォローアップ講座上で、認知症当事者とのかかわりや諸活動を通して、認知症について理解を深めることができた。
- ・ 朝の学習時間「緑が丘タイム」を活用し、計算等の習熟に力を入れ、算数の学力向上の一助とした。算数科の授業や緑が丘タイムを中心に、各種ドリルを活用し算数の学力向上を図った。
- ・ 10月と2月に読書週間を設定。学校図書館司書とも連携しながら、読書活動を推進した。学年ごとに、児童に読書の目的意識を持たせ、読書量を増やし、読解力の向上を目指した。学校図書館司書を中心に、図書室の整備と読書環境の充実を図った。
- ・ 3年生、4年生にプログラミング的思考を培うために、プログラミング活動を設定し、実施した。

【自己評価】

- ・ 各学年で分かる授業を推進し、基礎・基本の内容を定着させることに取り組んできた。保護者アンケート「落ち着いて学習に取り組んでいる」に関しては9割に近い肯定的評価を得たが、児童の学力の定着が十分ではないので、学習指導に関してはまだ不十分と考えている。学力を高められるよう、次年度も1人1台の学習用端末の活用、基礎・基本の再徹底

も含めて、保護者への情報発信と啓発に努めるとともに、家庭学習の定着などさらに協力を求めている。

- ・ 算数科では、3年生以上で習熟度別少人数指導を実施し、児童の基礎・基本の学力を向上させることを目標としてきたが、校内事情により3学期末まで展開することができなかった。「考える力」の育成は、各教科内で、問題解決的な授業の工夫や話し合い活動の工夫を通して取り組んできた。「みどりっ子算数道場（5、6年生）」「みどりっ子算数教室（1～4年生）」で細やかな指導を重ねてきたが、特別な支援を要する児童や学力的に低い児童の学力向上が十分でなく、引き続き本校の課題である。
- ・ 校内研究では、「各教科における効果的にICT機器を活用した授業づくり～教師と児童がともに学び続ける姿を目指して～」を研究主題にして、基礎的・基本的な情報操作を教員・児童がともに身に付け、小中一貫情報活用系統図やみどりっ子SNSルールなど校内環境の整備、ICT機器を活用した各教科の授業に取り組むことで、教師・児童がともに学習用具の一つとしてICT機器を効果的に活用し、学びに向かうことができるように研究を進めていった。その取組の結果、学習用端末上で、意見や考えの交換、撮影した動画による実技等の検証などを実施することができた。
- ・ 梶田中学校との小中一貫教育は、9年間を見通した小中一貫教育についての教員間の話し合いを実施した。今年度も、小小連携として、横山第一小、梶田小、本校を含め3校の5年生の交流音楽会（動画配信）を実施し、音楽を通して交流を図ることができた。

② 生活指導・特別支援教育について

- ・ 生活指導部や学年会の充実等により全教職員で全校児童を育てる気運を醸成し、児童の人権意識や規範意識、いじめをしない思いやりの心を育てた。
- ・ ふれあい月間時に年3回児童に振り返りアンケートを実施し、いじめや問題行動の早期発見・早期対応に務めた。毎週水曜日には、いじめ対応の時間を設け、いじめ対策委員会を行った。いじめに関して組織で解決していくことを機能させてきた。学期に1回ずつ、「いじめ防止集会」を実施し、校長講話・いじめに関する高学年の標語発表・思いやり等に関する道徳授業を連動させ、いじめ防止に努めた。
- ・ 毎週金曜日の生活指導夕会や、学期毎の「生活指導全体会」で児童の情報交換を密にし、課題のある児童、特別な支援を要とする児童の共通理解のもと、児童の対応、育成について、保護者の意識の啓発の在り方について共通理解を図った。
- ・ スクールカウンセラーとの連携の充実を図った。5年生で、スクールカウンセラーとの全員面接を実施した。また、適宜、スクールカウンセラーが、児童や保護者と現段階の課題や今後の方針に向けて面談を行ってきた。
- ・ 道徳授業地区公開講座では、座談会形式で公開講座を行った。保護者の考えや意見等を聞き、今後の教育活動へ生かしていきたい。
- ・ たてわり班活動等を活用し、同学年はもとより、異学年児童とも思いやりをもって接する雰囲気を作り、人権尊重の意識を育てるとともに、同じ学校の児童であるという仲間意識

の醸成に努めた。

【自己評価】

- ・ 全教職員の共通理解による「褒めて伸ばす教育」を充実させ、児童への励ましや声掛けを多くし、児童の思いやりの心や相手を尊重する心を育てることができた。
- ・ 児童アンケートでのいじめや問題行動の早期発見により、早めの対応を心がけ、いじめ防止に努めた。学級内でのよりよい人間関係を育み、いじめを許さない学級の雰囲気醸成、誰もが大切にされる学級づくりを通して、お互いに尊重しあう意識を育てているが、まだ課題は残っている。
- ・ いじめ防止集会を年3回各学期に実施し、いじめを許さない意識を育てた。児童の問題行動の対応に関しては、学年での複数の教員による対応を基本とし、問題を迅速に解決するように心がけた。今後は、イベントではなく、意味のある集会に仕上げていく。
- ・ 「いじめの対応」に関する保護者アンケートでは、肯定的意見は90%以上の高い数値であった。しかし、いつでもいじめは起きるとの認識の下、気を引き締め、生活指導の取組をさらに充実させ、児童が安心して気持ちよく過ごせる学校・学級を作るよう努力していく。いじめを発見した場合は、その解決に向けて早期の対応を心掛け、いじめ対策委員会を即時立ち上げ、対応を協議し、即対応に当たった。いじめが解消されるまで、全教職員で見守り、指導を続けてきた。今後も取り組んでいく。
- ・ たてわり班活動により、高学年にはリーダーシップ、低・中学年には集団への帰属意識を育てることができた。たてわり遊びで児童相互の仲間意識が芽生え、休み時間に自然に仲良く遊ぶ姿も見られた。
- ・ 特別支援を必要とする児童やその保護者に対しては丁寧に対応してきた。保護者の相談窓口として副校長と特別支援コーディネーター、スクールカウンセラーは十分に機能した。担任とも連携し、保護者への丁寧な対応ができた。支援を必要とする児童に対して拠点校の教員との連携を十分に深め、丁寧な指導で児童の情緒を安定させることができ、保護者の満足感も得られている。特別支援教育に関しての保護者の意識が低いケースもあり、また、特別支援教室の保護者の認知度も約80%の数値をいただいた。さらに保護者の啓発を図ると共に、教職員のさらなる意識改革が、本校の継続的な課題である。
- ・ スクールカウンセラーによる面接は、児童とカウンセラーの距離を縮め、児童の悩みを解消するうえで効果的であった。児童との面接回数が増え、安心・安全な学校生活の一助となった。保護者へのカウンセリングも丁寧に行われ、保護者の迷いや不安解消に大いに寄与している。今後は、これからの方向性などについても保護者とスクールカウンセラーで話し合いができるようにしていく。不登校児童に対する対応も共に行ってきたが、長期的な視点で不登校解消になるよう、引き続き丁寧に対応していく。
- ・ 児童の規範意識は向上してきているが、まだ、一部の児童に問題行動が見られる。今後も継続して指導していく。今年度も中・高学年児童によるあいさつ運動を学期に1回ずつ実施し、あいさつの意識が高まった。生活指導に関する梶田中学校区4校連絡会を通して、

共通理解や、今後の傾向と対策を講じることができた。

- ・ 特別支援教室運営にあたり、柵田小学校の担当教員と本校教員で児童の実態や指導方針に関して十分に連携が取れた。次年度も適切な支援体制を更に充実させていく。また、保護者に対して特別支援教室についての丁寧な説明をし、特別支援教育に関する保護者の啓発を図っていく。

③ 体力づくり・健康づくりについて

- ・ 体力テストを今年度も実施した。ミドリンピックを今後も継続して取り組み、さらなる体力向上を図りたい。また、持久走、長縄などの活動も継続して行っていく。

【自己評価】

- ・ 長縄、短縄跳びの時期を変更し、取組を充実させ、敏捷性や瞬発力を高めるようにした。
- ・ 児童の持久力を高められるよう、持久走の時間の確保を行った。
- ・ 外遊びを励行し、日常的に体を動かす習慣をつけてきた。
- ・ 栄養士を交えて、アレルギー対応に関する研修や共通理解を密にし、エピペン使用の研修会（4月）も実施した。アレルギーに関する事故、ヒヤリハット事例も出さなかった。

④ 家庭や地域との連携について

- ・ 地域運営学校として、委員の意見も取り入れながら連携して教育活動を充実させてきた。
- ・ 学校からの各種便り、学校ホームページや各家庭にH o m e & S c h o o l等を活用して、学校の情報を積極的に発信し、開かれた学校づくりに務めた。

【自己評価】

- ・ 学校運営協議会月例会では、学校の現状報告、委員からの提言、情報交換等を行い、内容を充実させてきた。運動会では、受付等の仕事を担当していただいた。また、今年度は、特色ある教育活動であった「森の活動」において、使用していた地域の活動場所のなら枯れがひどく、学校運営協議会委員が、本校のためにご尽力いただいた。結果の甲斐なく、状況が深刻すぎて、手を打つことができない状態であった。
- ・ 各学級での教育活動の取組は、学級通信を活用して情報発信を行った。情報の発信も、紙ベースではなく、H o m e & S c h o o lを活用した。次年度も更に充実させていきたい。
- ・ 今年度は、P T A、学校運営協議会と連携し、学力向上の一環として漢字検定を2回実施。約100名の児童が参加し、好評であった。保護者の学力向上への意識も高まり、次年度も継続していく。

⑤ 教育公務員としての服務規律の確立と教員の働き方改革について

- ・ 服務事故防止研修、職員会議等の場を活用して研修を実施。教職員の服務順守の意識を高めた。
- ・ ＳＳＳ（スクール・サポート・スタッフ）の効率的な活用を図った。

【自己評価】

- ・ 服務事故防止研修を７月と１２月に実施。また、職員会議や職員夕会の場を利用して服務事故事例を紹介し、服務事故を起こさないための意識の啓発を図った。今年度は、研修や情報提供を行ったことで、意識が高まり、交通事故等の服務事故を起こすことがなかった。次年度も、個人情報の漏洩、著作権、肖像権についても研修を行う。
- ・ スクール・サポート・スタッフのおかげで、教職員業務が軽減された。さらなる活用を試みたい。